

「海の気象」の60年を振り返る

「海の気象」編集委員長

佐伯 理郎

1. はじめに

「海の気象」は、海洋気象学会の主に船舶・漁業関係など海洋気象・海事関係など多方面にわたる個人・団体（B会員）を対象とした機関誌で、1955年（昭和30年）に創刊されました。「海の気象」の発行は、会員の実務に関係深い海上気象（海洋、地上気象、地震、津波等も含む）知識の普及・向上や海事関係者の体験、話題の交換などを目的としており、その内容は、これらに関係する論説、報告、体験記、写真、その他（和歌、俳句）など、実務に関係深い記事をはじめ非常にバラエティーに富んだものとなっています。

「海の気象」の発刊の辞を当時の神戸海洋気象台長・松平康雄氏が同誌第1巻第1号の巻頭言として寄せられています。その中で、『今回「海の気象」を海洋気象学会から刊行しますのは皆さんで共々に、特に海の気象現象を研究し合うために他ならないのです。気象台の職員は直接海の色々な気象現象にタッチする機会がありませんので、単に海員の方々にいただいた資料を解析するにとどまりますが、海員の方々は其体験を又正しい資料を御紹介下され、相互に勉強して海の気象をマスターし、海難を防止することに努力し、本誌の目的を果たすことに致したい念願です。』と述べられています。まさに、このことが「海の気象」を刊行する目的であったのです。

「海の気象」も2014年度で第60巻という節目の年を迎えました。そこで、読者の皆さんとその歴史を振り返り、今日においても価値を失っていない記事の数々を利活用していただくために、前号と本号にこれまでの本誌の総目次を掲載しました。ここでは、総目次から見えてくる「海の気象」の過去を振り返り、現在・将来においても利活用できる記事の手がかりを少しでも提供できればと思います。

2. その量の変遷

大いなる意気込みと期待のもと1955年6月に第1巻第1号の発行以来、1995年1月に平成7年兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）が襲い発行が危ぶまれることもありましたが、関係者のご尽力により今日までたゆまず発行されてきました。

当初B5版でしたが、1995年度の第41巻からはA4版となっています。発刊当初の第1巻は第7号まで、第2巻から第4巻は合併号はあるものの年間12冊発行されています。その後、第5巻からは年間6冊のペースで第45巻まで続けられました。第46巻（2000年度）以降は年間3冊に減っています。当初は年間300ページを超えていて、第2巻（1956年度）は426ページに達しています。その後第6巻（1960年度）以降は120～150ページとなりましたが、第11巻（1965年度）～第44巻（1998年度）は180～250ページと再び増加しました。第46巻（2000年度）以降は、平均して100ページ前後となっています。

3. 発行当初は「台風」、「海難」がキーワード

発刊された当初は、台風に伴う暴風・高波による船舶への被害が甚大で、気象庁が発表する台風情報の使い方や台風予報の精度の解説などの記事が多く見られます。また避航の方法や台風に遭遇した時の港における船舶の停泊の方法など、船長・航海士による体験談も誌上を飾りました。さらに新聞に掲載された海難記事を収集整理し、各号に掲載していました。また、北西太平洋で発生する台風ばかりでなく、インド洋のサイクロン、北大西洋のハリケーンに関する記事も多く見られます。そのな

か、1959年9月に伊勢湾台風が甚大な被害をもたらし、対応して、伊勢湾台風時の東海地方をはじめ大阪湾・紀伊水道・東京湾の気象状況などを詳しく解説した臨時号が1960年7月に発行されています。

また、興味深いのは、「国会でとり上げられた気象による海難」との記事が1983年から1985年にかけて連載されたことです。これは、第2次大戦後大きな社会問題となった気象業務、とくに災害を伴った気象現象について、「国会の速記録にみる気象業務」（杉浦次郎著）として気象庁刊行の「測候時報」（1980～1982年）に掲載されたものから、とくに海難に関する以下の8件について、引用・加除を行い、5回に分けて掲載されたものです。

- ①昭和29年9月洞爺丸台風による青函連絡船沈没事件
- ②昭和33年1月南海丸沈没事件
- ③昭和40年10月台風第29号による漁船大遭難
- ④昭和52年9月沖永良部台風
- ⑤昭和29年5月メイストームによる北海道沖漁船の大量遭難
- ⑥昭和45年1月低気圧による空光丸事故
- ⑦昭和46年1月島根沿岸の高波
- ⑧昭和50年4月小名浜港濃霧中の衝突事故

これらの記事は、気象警報、気象予報の作成・発表時の気象庁など、行政側の対応の様子が生々しく伝わってくる大変貴重なものとなっています。

4. 「海の気象」の柱となっていた特集号

「海の気象」では、伊勢湾台風について特集した臨時号の発行をきっかけに、第8巻（1962年度）から概ね毎年1回特集記事を組み、読者の要望にこたえてきました。多くは、「台風」や「海難」、風や波に関する「海上気象統計」、そして船舶向けの「気象庁気象無線模写通報（JMH）」の内容と利用法などでした。1977年の静止気象衛星「ひまわり」の打ち上げ前後には、衛星画像をはじめ衛星から作られるさまざまな気象資料についての解説記事が特集されました。また、波浪、霧、海氷など海難の原因となる気象・海洋気象についての解説記事も特集として組まれました。

- 「台風」や「海難」に関するもの
 - 伊勢湾台風時の海上気象（伊勢湾台風臨時号（1960年7月））
 - 台風（第12巻第4／5号（1967年1月））
 - 台風経路と500mb天気図（第17巻第5／6号（1972年3月））
 - 日本近海における1973年の海難と波浪図（第20巻第5／6号（1975年4月））
- 「海上気象統計」に関するもの
 - 本邦南方海上の風浪予想図（第8巻特別号（1962年3月））
 - 太平洋及び印度洋の海上気象統計（第14巻第1／2号（1968年6月））
 - 北太平洋の低気圧経路（月別低気圧経路と解説）（第16巻第5／6号（1971年4月））
- 「気象庁気象無線模写通報（JMH）」に関するもの
 - FAXの利用法（第15巻第2／3号（1969年9月））
 - 気象模写放送図の利用法（第21巻第5／6号（1976年4月））
 - 気象・海象模写放送図の解説 海事関係者用（第29巻第5／6号（1984年6月））
 - 第1気象無線模写通報（気象FAX）解説（第40巻第2号（1994年7月））
- 「気象衛星」に関するもの
 - 気象衛星写真の解釈と利用（第22巻第3／4号（1976年12月））
 - 静止気象衛星「ひまわり」（第24巻第3／4号（1978年10月））

○「気象・海洋気象一般」に関するもの

オホーツク海の海況と気象（第11巻第1号（1965年7月））

瀬戸内海の気象と海象（第13巻第1/2号（1967年4月））

日本近海の霧（第18巻第5/6号（1973年4月））

波浪（第19巻第5/6号（1974年4月））

海水（第23巻第6号（1978年4月））

日本海の海象と気象（第26巻第1/2号（1980年5月））

熱帯地方の気象（第27巻第5/6号（1982年3月））

WMO航海者のための天気図活用法（第30巻第2号（1984年9月）～第30巻第5/6号（1985年3月））

WMO（世界気象機関）の海上気象サービス指針（第31巻第5/6号（1986年3月））

瀬戸内海の気象・海象（第35巻第5/6号（1990年3月））

これらの特集は第40巻（1994年度）をもって終わりましたが、入れ替わるように、『海の気象』教養講座』と題した気象・海象の基礎知識に関する解説記事が、神戸海洋気象台の職員を中心とする執筆陣により21回（第40巻第1号（1994年5月）～第44巻第1号（1998年7月））にわたり連載されました。

5. 「海の気象」を飾った連載記事

上述したように、「海の気象」の60年間のうち前半30～40年間は特集記事が担っていたところが大きいと言えます。しかし後半に入ると、海上気象の専門家や船舶運航関係者による連載記事が「海の気象」の中心となってきました。前節の『海の気象』教養講座』は海上気象の専門家による解説の連載でしたが、そのほかにも多くの“書き手”が執筆を競い、読者の幅広い関心に応えてきました。

その中でも長きにわたり多くの連載記事を投稿されたのが、元海洋気象学会長であった半澤正男氏です。同氏は、まず「海・船・気象 10の豆知識」と題する記事を第27巻第4号（1982年1月）に寄稿し、その後「気象・海洋に貢献した海事関係者」と題して第28巻第1号（1982年8月）から第30巻第4号（1985年1月）まで全12回にわたり連載されました。並行して「WMO航海者のための天気図作成とその活用法」（第30巻第2号（1984年9月）～第30巻第5/6号（1985年3月））と「WMO（世界気象機関）の海上気象サービス指針」（第31巻第5/6号（1986年3月））を特集号のために翻訳されています。そして「海洋学・気象学の大発見につながる航海」を第31巻第1号（1985年5月）から第32巻第5/6号（1987年3月）まで8回連載されました。さらに「海の気象」の連載記事の中で最も長い50回を記録した「海洋気象史話」を第33巻第1号（1987年5月）から第42巻第1号（1996年5月）まで約9年にもわたり執筆されました。同氏は、これら海洋気象に関する執筆活動も含め「海洋気象業務に関する国際的活動及び啓蒙普及活動により海難防止に寄与した功績」により、1996年（平成8年）5月に財団法人（現在は一般財団法人）日本気象協会から岡田賞（第4代中央気象台長・岡田武松氏のご功績を記念する事業として、昭和32年に財団法人岡田武松先生記念会によって設けられ、昭和48年から日本気象協会に継承され運営されています。）を受賞されました。まさに、「海洋気象史話」の完結を待つように受賞されたわけです。そして受賞直後には、「昭和・平成の海洋、海洋気象学者」の連載を第42巻第2号（1996年8月）に新たに開始されましたが、1997年3月24日に逝去され、連載も第2回（第42巻第5号（1996年12月））で終了しました。海洋気象に関する多くの示唆に富む記事を投稿されたご功績は、21世紀に入り10年以上を経過した現在もその輝きを失っていません。一読者として、「昭和・平成の海洋、海洋気象学者」の続きを拝見したいとの思いは強くなるばかりです。

上瀧昭六氏を忘れるわけにもいきません。同氏は、船長や商船学校の教官としての仕事あるいはそのかわりで巡り合った様々な経験や寄港した街や国々の風物を随筆風にまとめられています。上瀧

氏が初めて登場したのは第27巻第5/6号(1982年3月)の「台風とハインリッヒの駒」からで、「巡航45年(最終回)『商船学校教官』」(第42巻第1号(1996年5月))を最後にその数は67編にも達しています。また、外航船の船長や瀬戸内海のパイロットを務められた本郷寿茂氏も、「私の経験」と題する体験記を第30巻第3号(1990年9月)から第41巻第6号(1996年3月)まで30回にわたり連載されています。さらに、渋谷宏昌氏が「海の男のモノローグ」というタイトルで、内海パイロットという仕事上の体験やそこで出会った船長などの関係者との思い出を色鮮やかに語ってくれています。この記事は、本郷氏の連載を引き継ぐような形で第41巻第4号(1995年11月)から第45巻第5/6号(2000年3月)まで20回にわたり連載されました。洲本測候所長などを務められた和田香正氏も、気象・海洋気象のみならず広く地球環境など様々な分野に題材を求め、第34巻第2号(1988年7月)掲載の「気候の変化について」を皮切りに2~4ページの長さの科学随筆を34編も寄稿されました。

一方、海洋気象学会の事務局を担当した神戸海洋気象台の専門家の方々も、先に触れた「『海の気象』教養講座」シリーズの執筆のみならず、海事関係者の興味を満足させるような連載記事を執筆されています。とくに神戸海洋気象台港湾気象官などを歴任された原見敬二氏は、気象庁在職当時に事務局に係わる事務に多くの力を注がれたうえに、「気象による海難」について「1972年5~9月の気象による海難」を皮切りに、毎年3~5回定期的に「海の気象」に報告をされ、1976年8~12月の分まで続けました。退職後も「海事史略年譜」とのタイトルで、紀元前(第44巻第5/6号(1999年3月))から現在(2000年)(第51巻第2号(2005年12月))までの海事史を22回にわたり丁寧に記述されたのはじめ、日本の港湾都市点描を6回にわたり執筆されたほか、2011年12月に91歳で亡くなられる直前まで、「海の気象」への投稿を精力的に続けられました。その数は百編以上に及んでいます。

「海の気象」の読者であるB会員は、船長・航海士をはじめ海洋気象の専門家など『海の男』が大半を占めていて、航海途上多くの様々な港に立ち寄ります。そこは海の男に一時の休息を与えてくれますが、これら港町の紹介記事が、「港のあるまち」と題して第24巻第2号(1978年9月)から第27巻第5/6号(1982年3月)まで18回にわたり連載されました。

6. おわりに

かけ足で「海の気象」の60年を振り返りましたが、筆者の勘違いや勉強不足で、とんだ間違いを犯しているかもしれません。また、取り上げさせていただいた著者の方々にも偏りがあるかもしれません。ご容赦ください。振り返って目次を眺めていますと、本当に多くの方々のご協力により出来上がっているのだと改めて感じました。

「海の気象」をご覧になりたい方は、国立国会図書館(東京都千代田区永田町1-10-1)のほか、気象庁図書館(東京都千代田区大手町1-3-4)には第5、6巻を除く全巻がそろっています。閲覧室でどなたも自由に見ることができます。これはと思う記事がありましたら、ぜひお訪ねください。なお、気象庁図書館へのアクセスや利用時間・方法については気象庁のホームページを参照ください。

謝辞

本稿を著すにあたっては、「海の気象」のバックナンバーの複写等について、角野康二氏(大阪管区気象台、海洋気象学会編集担当理事)に一方ならずお世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。